



十二指腸液を用いた、 新規膵がん検診システムの構築

美登路 昭

Akira Mitoro

中央内視鏡部／病院教授

- キーワード 膵臓がん、早期発見・検診、十二指腸液
- 対象疾患 膵臓がん
- 研究フェーズ 基礎的
- モダリティ 内視鏡

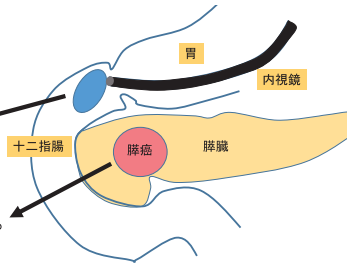
シーズ概要

上部消化管内視鏡検査時に吸引する十二指腸液を用いた膵癌早期診断のための新しい検診システムを構築する。早期発見が困難で予後不良な膵臓癌に対する有効な検診システムの開発は急務であるが、根治可能な早期がん、特に上皮内がんを検出できる画像検査や血中バイオマーカーは未だ存在しない。膵液を用いた細胞診やバイオマーカーは、早期癌の診断において有用であるが、膵液を膵管内から採取する作業は、侵襲的で検診としては不相当である。一方、経鼻内視鏡の普及や対策型胃癌検診への内視鏡検査の導入に伴い、スクリーニングや検診目的での上部消化管内視鏡検査の施行機会は増している。その際に膵液を含有する十二指腸液を採取することは、非侵襲的かつ容易である。十二指腸液を用いた細胞病理学的、分子生物学的、生化学的な検討を行い、膵癌検診としての有用性を探索する。

対策型胃内視鏡検診と併施できる膵癌検診システムの構築

上部消化管内視鏡検査時に吸引する十二指腸液中には膵液が豊富に含まれる。

発生早期の膵臓癌細胞や関連するバイオマーカーは膵液中に存在あるいは分泌される可能性が高い。



研究成果の応用可能性

現在、膵癌に対する対策型検診で用いられているアミラーゼより有意に感度の高いバイオマーカーが検出されれば、内視鏡を用いた対策型胃癌検診時に施行可能な膵臓がん検診キットの開発に繋がる。

Appeal Point

アピールポイント

現在、血液を用いた膵癌早期発見の試みは多く行われているが、膵癌細胞が血管に侵入した後でなければ判明できない。膵管上皮から発生する膵癌細胞をより早期に検出するためには、膵液を含有する検体での検討が必要かつ重要である。